

37の兵村に響いた ラッパの音

札幌市の琴似に残る屯田兵屋

屯田兵とは、明治期に北海道内に配備された農業開拓兼務の軍隊制度で、1875（明治8）年に札幌郡琴似村（現在の札幌市西区琴似）に第一大隊第一中隊の兵村が置かれたのが始まりである。

兵村は一中隊200戸を単位に編制し、兵は家族とともに兵村の住居「兵屋」に居住し、軍事訓練と開墾に励んだ。兵屋は平屋建て56・7㎡、マサ葺き屋根、8畳と4畳半の和室に、炉と流し付きの9畳ほどの板の間、同じ大きさの土間があった。家族はこの和室で寝起きし、炉のある部屋が食事や団欒の場になった。便所は外にあり、井戸や浴室も外に作られ、共同で使った。

質素な建物なので、冬期間の寒さは厳しく、時には生木を炉にくべたので、煙が部屋中に充満し、目を傷める人が続出した。また野ネズミが出没するので、土別屯田などではやむなくネコを配るという苦肉の策もとられたという。

屯田兵は当初、北辺の防備と土族の救済が目的だったが、1877（明治10）年の西南戦争では、琴似・山鼻の両屯田兵にも出兵命令が下り、各地を転戦した。この戦いで27人の戦死者を出した。

1890（明治23）年から応募資格が士族だけでなく平民まで広げられたが、1894（明治27）年に日清戦争が起きると、屯田兵を中心に臨時第7師団が編制され、出動体制が組まれた。2

北見に残る屯田兵人形

北見市川東の信善光寺本堂に珍しい屯田兵人形75体が祭られている。この人形は開基の吉田信静尼が、ノツケウシ（現在の北見市）地区に入植して苦労を重ねた屯田兵の功績を後世まで伝えようと発願し、屯田戸主の協賛を得て、名古屋市の玉正商会に発注、人形師の荒川宗太郎が、弟子の木場賢治と二人で製作した。

信静尼は屯田兵屋を回って熱心に説いたが、最初のころは、「生きているうちに寺に収める人形を作るなんて」と嫌がる人もいて思うように進まない。それでも信静尼は何体かずつまとすると発注し、出来上がった人形から順に本尊脇のひな段に並べていった。

ところが1944（昭和19）年2月2日、信静尼は町に行こうと道を歩いていて馬そりに轢かれ亡くなってしまふ。突然の死だった。享年64。これをモデルにしたのが新田次郎の小説『野付牛の老尼』である。

屯田兵人形の材料はキリとサワラ材で、高さ67・5cmに統一されている。中央に三輪光儀大隊長を据え、全部で75体の兵士の人形が並んでいる。大隊長だけ作りが違うが、あとは63体が黒色軍装、11体がカーキ色の軍装だ。顔の表情は写真などを使って作ったので、